

レースっていいよね

## 第22回 「あなたの値段、いくらですか？」の巻

レースを生業としているレース屋さん。その種類はいくつかある。

まず、レーシングカーを設計・製作するコンストラクター。次に、客の持ち込むレーシングカーを保管したりメンテナンスを請け負ってくれるガレージ。そして、純粹にレース活動を目的としたレーシングチーム。

では、これらのレース屋さんはどうやって金を得ているのか？ コンストラクターの場合至ってシンプル、自分達の作った商品を客に売れば金になる。また、自社の車をメンテナンスし、客のニーズに対応している場合がほとんど。ただし、これはいわゆるワークスと呼ばれるものではない。

なぜなら、コンストラクターは車を買った全ての客に対し公平でなくてはならないから、自社メンテだからといって何か特別なことをするわけではない。とはいっても、何せ設計から製作までこなしているから膨大なデータ量を持ち、メンテナンスもスムーズな対応ができるのは大きなメリットであり得るだろう。

メンテナンスガレージも仕組みはシンプルである。大概是客の持ち込んだレーシングカーの面倒を見るから、金は客から徴収する。ガレージの場合、コンストラクターのようにメーカーに縛られることが無いから、客の参加したい様々なカテゴリーに出られるというメリットがある。

さて、レーシングチームはどうやって金を得るのか。ここで言うチームは、いわゆるプロフェッショナルチームのことであるが、この場合、協力者となるスポンサーを集い、その資金によって活動するという具合だ。それと引き換えに、スポンサーはチームを使い広告活動が出来る訳である。

いずれにしろ、どんなタイプであったとしても、それぞれにプロとして仕事をしている以上、雇われている限りサラリーマンであり、給与体系は企業と何ら変わるものではない。

中には契約金で仕事をする人も見受けられるが、大概是会社に属するサラリーマンである。

にも関わらず、である。私の周囲では自分自身のサラリーについて無頓着な人が多い。いや、給料の大小について文句をつけろということではない。

勿論、その大小についても、自信が無くて納得ずくならまだしも、自分の技術に対し正当な評価を得ていないと思うならば当然話し合いの場を持つべきである。

が、この場ではそのことではなく、例えば自分の給与がどのようになっているのか、またボーナスなども支給されるのか否かを会社任せで確認もしない点などである。

理由はそれとなくわかっている。人がいいから、会社の経営状態に遠慮してしまう一面があるようである。

しかし、根本的に経営状態とその影響により自分の給与がどうなるのかを気にしておくのは決して悪いことではない。むしろ、プロであるのなら自分自身の給与を常に意識すべきである。

日本のレースの業界は基本的に薄給であり、滅私奉公に近いという伝統を持つ。

給与の大小は仕方ないにしても、レース業というものを社会的に仕事として認知されるためには、こういったいかにも日本人に不得手な交渉ごとについてまず克服しなくてはならない。

また、給与と共に労働時間についても同様である。

よく世間では、レースをする人は徹夜も気にせず頑張っているというイメージを持たれている。確かにそういう一面もある。特に徹夜や奉仕残業が美德とされる風潮も東のほうの業界にはあるようである。

実際、レースを前にして必要があれば時間など目もくれずに製作や修理に勤しまなくてはならない場合はある。

しかし、だからといってそれはあくまでも単発的な、イレギュラーな仕事であり、その仕事の仕方を標準にしてはいけないはずである。

レース業をしているのだから遅くまで仕事をして正解というのは私は嘘であると信じる。

何故なら、どのような職種であれ、プロとして仕事をするのであればキチンと時間を管理しなくてはならない。時間内で仕事を完了させることもプロの技なのである。

かくいう私も、実は最初は「レース業だから時間関係無し」という考えを持っていた。

しかし、ウエストレーシングカーズ社長、神谷氏にプロとしての意識について考えさせられる出来事が

あった。

かつてサーキットへ遠征に出かけていた時の話である。

その日、予選を終了した後の基本メンテを終え、抱えていたトラブルについて原因を見つけ対策を施すのに少しばかり時間を食い、サーキットの営業時間ギリギリとなっていた。

私としては対策に一生懸命になる余り、時間を度外視していたのだ。切羽詰った中で社長に言われた言葉が先述の「時間の中で仕事を終わらせるのもプロだ」という一言であった。

このとき、今まで持っていた固定観念が音を立て崩れ去り、まさに目から鱗が落ちる思いであった。

今思えば、確かにあのときの仕事内容を考えれば社長の言う通り、時間内で何とかしなくてはならないものであったと思う。

時間がかかるということは、技能の問題と、金の問題という要因を含む。

ただいたずらに、流れのままに残業するなどもってのほかである。

ちなみに欧米では、特にイギリスにおいては、各個人の仕事がキチンと管理され、また時間も大切にされている。

よく、彼らは5時前に掃除し出して時間と共に帰ると言うが、全くその通りである。

日本人はそれをいかにも仕事をしていないような皮肉を込めて言う。しかし、本来彼らのほうがプロフェッショナルな仕事の仕方なのである。

だからこそレース業そのものが社会的な認知を受けているのだ。

また、自分の時間、すなわち自分の人生を大切に考えているからこそ、仕事も大切に考えることができるのである。

こういった部分を見つめ直さない限り日本のレース業が社会的に認められることなど到底不可能である。